

東京成徳大学大学院心理学研究科
博士論文（要約）

発達障害のある大学生の大学生活支援に関する研究
——大学環境およびスキル・自己理解に焦点をあてて——

2023 年度

東京成徳大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻

濱田 里羽

1. 題名

発達障害のある大学生の大学生活支援に関する研究

——大学環境およびスキル・自己理解に焦点をあてて——

2. 全体要旨

本研究は、発達障害のある大学生の大学生活支援を検討するため、大学環境および学生のスキル・自己理解に焦点をあてながら、以下の研究目的を設定した。

①発達障害のある大学生が苦戦しやすい大学特有の環境と円滑な大学生活のために大学生に求められるスキルや自己理解を明らかにする。

(研究 1)

②発達障害のある大学生がもつスキルや自己理解が大学環境への適応を通して単位取得や卒業に与える影響を明らかにする。(研究 2)

③発達障害のある大学生を含め、大学生の円滑な大学生活のために大学で可能なスキルトレーニングの効果を明らかにする。(研究 3)

④発達障害のある大学生が捉えている大学生活における苦戦や重要となるスキル・自己理解と支援ニーズを確認する。(研究 4)

研究 1 では、発達障害のある大学生が苦戦しやすい大学特有の環境および、大学生活で重要になるスキル・自己理解を調査した。全国 780 校の大学教職員を対象に無記名式のアンケート調査を実施し、161 校から回答を得た。苦戦しやすい環境については、「主体性が求められる環境」「画一的ではない授業システム」の 2 因子が抽出された。また自由記述から「学生自身で対応しなければならない場面の多さ」等 6 つの大カテゴリーを得た。また学生に重要なスキルでは「大学コミュニティとつながるスキル」「読み書きのスキル」「主体的に取り組むスキル」「健康的に生活するスキル」の 4 因子が抽出された。また自由記述から「困難な場

面に対応するスキル」等 5 つの大カテゴリーを得た。自己理解については自由記述から「自分の特性の理解」等 3 つの大カテゴリーを得た。

研究 2 では 600 名の大学生を対象に Web アンケートを実施した。その中から抽出した発達障害傾向高群（150 名）は低群（148 名）に比べ、「単位取得状況」「主観的な卒業可能性」が低いことを確認した。スキルは「学修に取り組むスキル」「主体的に取り組むスキル」「心身のバランスを保つスキル」の 3 因子、自己理解は「自己理解」の 1 因子構造であることを確認した。大学環境での苦戦は「自己表現やコミュニケーションを求められる環境での苦戦」「複数のリソースから選択が求められる環境での苦戦」「臨機応変な対応が求められる授業環境での苦戦」の 3 因子を抽出した。さらに、発達障害傾向低群は「学修に取り組むスキル」が「単位取得状況」と「主観的な大学卒業可能性」に直接影響を及ぼしていた一方、発達障害傾向高群は「学修に取り組むスキル」の「単位取得状況」および「主観的な大学卒業可能性」への直接的な影響に加え、「主体的に取り組むスキル」が「自己表現やコミュニケーションを求められる環境での苦戦」を介して「主観的な大学卒業可能性」に影響を及ぼしていた。

研究 3 では、筆者が A 大学で行った時間管理スキルおよびコミュニケーションスキルの育成を目的とした 2 つの学生支援プログラムの有用性を再分析した。各プログラムは一定の有用性を確認できたが、参加の継続や参加に消極的な学生へのアプローチが課題となった。

研究 4 では学生への聞き取りを通して、本研究で用いた大学生活における苦戦および重要となるスキル・自己理解の項目が概ね妥当であることを確認した。また各学生は大学適応のための工夫を見つけていること、個別の相談をはじめとした教職員とのつながりが学生を支えることが明らかになった。一方で学内システムに課題があることも確認された。

3. 目的と章構成

(1) 目的

発達障害のある大学生の大学生活支援を検討するため、大学環境および学生のスキル・自己理解に焦点をあてながら、以下の目的を設定する。

①発達障害のある大学生が苦戦しやすい大学特有の環境と円滑な大学生活のために大学生に求められるスキルや自己理解を明らかにする。

(研究1)

②発達障害のある大学生がもつスキルや自己理解が大学環境への適応を通して単位取得や卒業に与える影響を明らかにする。(研究2)

③発達障害のある大学生を含め、大学生の円滑な大学生活のために大学で可能なスキルトレーニングの効果を明らかにする。(研究3)

④発達障害のある大学生が捉えている大学生活における苦戦や重要となるスキル・自己理解と支援ニーズを確認する。(研究4)

(2) 章構成

第Ⅰ部 序論 問題の所在と研究の目的

第1章 発達障害のある大学生の大学生活への適応に関する現状と課題

第2章 先行研究の概観

第3章 本研究の目的と意義および基本的概念の定義

第4章 本研究の構成

第Ⅱ部 本論 1 発達障害のある大学生の円滑な大学生活に影響する関連要因

第5章 研究1 発達障害のある大学生の円滑な大学生活に影響する関連要因——大学教職員を対象とした調査——

第6章 研究2 発達障害のある大学生の大学生活における円滑度に影響する関連要因——大学生を対象とした調査——

第Ⅲ部 本論 2 発達障害のある大学生の大学生活支援の展開可能性

第 7 章 研究 3 大学生を対象とした大学生活に重要なスキルを育成するプログラムの試行と有用性の検証

第 8 章 研究 4 発達障害のある大学生の大学環境における苦戦と大学生活に重要なスキルや自己理解のための支援ニーズ——大学生（当事者）による検証——

第Ⅳ部 結論 本研究のまとめ

第 9 章 総合考察

4. 各章要約

第 1 章 発達障害のある大学生の大学生活への適応に関する現状と課題

これまで国内外の研究において、発達障害のある大学生の大学適応の難しさや支援上の課題が指摘されている。適応は環境と個人の相互作用からなる状態である。発達障害のある大学生の大学生活への適応に関しても、大学特有の環境（環境要因）と、学生のもつスキルや自己理解（個人要因）の両面から不適応の背景を検討する必要がある。

第 2 章 先行研究の概観

本章では、発達障害のある大学生の大学生活適応に関する国内外の先行研究を概観した。本研究に関連する国内文献 131 論文、海外文献 31 論文の中から、①発達障害のある大学生の大学適応に影響する大学環境の特徴、②大学に適応するため発達障害のある大学生に求められるスキルおよび自己理解、③大学入学前の支援例、④大学入学後の支援例、これら 4 つのテーマの先行研究について概観した。

第 3 章 本研究の目的と意義および基本的概念の定義

本研究は、発達障害のある大学生の大学生活支援を検討するため、大学環境および学生のスキル・自己理解に焦点をあてながら、以下の研究

目的を設定する。

①発達障害のある大学生が苦戦しやすい大学特有の環境と円滑な大学生活のために大学生に求められるスキルや自己理解を明らかにする。

(研究 1)

②発達障害のある大学生がもつスキルや自己理解が大学環境への適応を通して単位取得や卒業に与える影響を明らかにする。(研究 2)

③発達障害のある大学生を含め、大学生の円滑な大学生活のために大学で可能なスキルトレーニングの効果を明らかにする。(研究 3)

④発達障害のある大学生が捉えている大学生活における苦戦や重要となるスキル・自己理解と支援ニーズを確認する。(研究 4)

発達障害のある大学生が円滑な大学生活を送る上で苦戦する大学環境の特徴および重要となるスキル・自己理解の構造を明確にすることは、大学教育のあり方を検討する上で大学教育分野における学問的な意義がある。また、大学による環境面の整備や合理的配慮の検討、学生のスキルや自己理解の育成に取り組む際の実践的な意義もある。

第 4 章 本研究の構成

第I部では発達障害のある大学生を取り巻く現状や先行研究を概観した上で、本研究の目的と構成を確認する。第II部では、発達障害のある大学生の円滑な大学生活に影響する関連要因を検討する。研究 1 では大学教職員を対象に、発達障害のある大学生が苦戦しやすい大学特有の環境および大学生活で重要になるスキル・自己理解を調査し、内容を明らかにする。研究 2 では大学生を対象に大学環境での苦戦の経験とスキル・自己理解の定着度、単位取得状況や主観的な卒業可能性を調査し、これらの関係を明らかにする。第III部は発達障害のある大学生の大学生活支援の展開可能性を検討する。研究 3 では、時間管理スキルおよびコミュ

ニケーションスキルの育成を目的として、筆者が A 大学で行った 2 つの学生支援プログラムの有用性を再分析する。研究 4 では、研究 1～3 の結果、考察について発達障害のある学生の意見を聞き、また具体的、個別的なエピソードを収集しながら支援ニーズを検証する。第 IV 部は本研究で明らかになったことを総括しながら、大学における発達障害のある大学生への支援について提言するとともに、本研究の貢献と課題を論じる。

第 5 章 研究 1 発達障害のある大学生の円滑な大学生活に影響する関連要因——大学教職員を対象とした調査——

研究 1 では、アンケート調査に協力のあった 161 校の大学教職員の回答から、発達障害のある大学生が苦戦しやすい大学特有の環境（研究 1-1）と大学生活のために重要となるスキルや自己理解（研究 1-2）を明らかにした。

研究 1-1 では「発達障害のある大学生が苦戦しやすいと思われる大学特有の環境」20 項目について、どの程度苦戦するか尋ねた。概ね苦戦すると捉えられ、因子分析から「主体性が求められる環境」「画一的ではない授業システム」の 2 因子が抽出された。また自由記述から、「学生自身で対応しなければならない場面の多さ」等 6 つの大カテゴリーを得た。

研究 1-2 では、「発達障害のある大学生が大学生活を継続し卒業するために重要なスキル・自己理解」について、スキル 18 項目、自己理解 3 項目がどの程度重要か尋ねた。スキルは 18 項目全てが重要とされる傾向にあり、因子分析の結果、「大学コミュニティとつながるスキル」

「読み書きのスキル」「主体的に取り組むスキル」「健康的に生活するスキル」の 4 因子が抽出された。自由記述からは「困難な場面に対応するスキル」等 5 つの大カテゴリーを得た。自己理解も 3 項目全てが重要とされる傾向にあり、自由記述からは、「自分の特性の理解」等 3 つの大

カテゴリーを得た。

第6章 研究2 発達障害のある大学生の大学生活における円滑度に影響する関連要因——大学生を対象とした調査——

研究2では、大学生600名を対象にWebアンケート調査を実施し、抽出した発達障害傾向高群150名、低群148名の回答から、発達障害のある大学生のもつスキルや自己理解および大学環境での苦戦と、大学生活の円滑度との関連を分析した。

研究2-1では、研究1-2を参考に作成した大学生活に重要なスキル（24項目）・自己理解（5項目）の定着度と大学生活の円滑度（「単位取得状況」「主観的な大学卒業可能性」）との関連を調べた。発達障害傾向高群は低群に比べ大学生活の円滑度を低く捉える傾向であった。また、発達障害傾向高群は低群に比べ、スキルや自己理解の定着度を低く捉える傾向であった。さらに「宿題、授業への出席等、学業上の自立ができていない」等において学生全般の円滑な大学生活と関連し、「自ら相談窓口や教職員へ支援を求めることができる」等で発達障害傾向高群の円滑な大学生活と関連していた。因子分析により、スキルは「学修に取り組むスキル」「主体的に取り組むスキル」「心身のバランスを保つスキル」の3因子、自己理解は1因子構造であった。

研究2-2では、研究1-1を参考に作成した苦戦しやすい大学環境（26項目）の苦戦度と大学生活の円滑度との関連を調べた。発達障害傾向高群の方が低群に比べ、大学環境で苦戦していることが示唆された。また発達障害傾向高群は低群に比べ、大学生活の円滑度と関連する大学環境での苦戦の項目は少なかった。因子分析により、大学環境での苦戦は「自己表現やコミュニケーションを求められる環境での苦戦」「複数のリソースから選択が求められる環境での苦戦」「臨機応変な対応が求め

られる授業環境での苦戦」の3因子が抽出された。

研究 2-3 では、重回帰分析を用いて、発達障害のある大学生がもつスキルや自己理解および大学環境での苦戦と円滑な大学生活との関連を明らかにした。発達障害傾向低群の「単位取得状況」「主観的な大学卒業可能性」には「学修に取り組むスキル」が直接的に影響していることが示唆された。一方発達障害傾向高群では、「単位取得状況」には「学修に取り組むスキル」が直接的に影響しているが、「主観的な卒業可能性」には「学修に取り組むスキル」の直接的な影響と、「主体的に取り組むスキル」が「自己表現やコミュニケーションが求められる環境での苦戦」を介して影響していることが示唆された。

第7章 研究3 大学生を対象とした大学生活に重要なスキルを育成するプログラムの試行と有用性の検証

研究 3 では、筆者が A 大学で過去に行った時間管理スキルおよびコミュニケーションスキルの育成を目的とした2つの学生支援プログラムの有用性を再分析した。

研究 3-1 では、筆者が A 大学において過去に実施した時間管理スキルの育成を目的とした学生支援プログラム（濱田, 2014a; 濱田, 2014b）の有用性を再分析した。プログラムは毎日の「週間予定表」と「TO DO リスト」の記入, 週1回の継続した個別の「定期チェック」, 参加学生が集まる3回（開始時・中間・終了時）の「全体セミナー」から構成された。本研究では最終日まで継続して参加した12名について、「時間管理の自己診断テスト」（田中, 2009）の変化, 「日常生活スキル尺度（大学生版）」（島本・石井, 2006）の変化, 「プログラム終了時のアンケート」によって有用性を分析した。継続した参加により, 計画性や情報の取捨選択等の行動面の向上に加え, 前向きで積極的な生活

態度といった心理面にも効果が見られた。プログラムの参加を継続できた学生にとっては、有用度は高く評価された。一方、継続に至らなかった学生もいたことは、課題が残った。

研究 3-2 では、筆者が A 大学において過去に実施したコミュニケーションスキルの育成を目的とした学生支援プログラム（濱田，2015）の有用性を再分析した。プログラムは月 1 回，90 分で行った。内容は，エクササイズ，レクチャー，フリートークから構成された。プログラムの有用度は，毎回の参加者アンケート，各年度の複数回参加者へのアンケートから分析した。毎回の参加者アンケートでは，学生よりプログラムの内容が役に立ったと評価されていた。年度末のアンケートでは，継続して参加した学生の多くが，自身のコミュニケーション力の向上を感じ，自信を高めていた。さらに，プログラムで学んだことを日常生活においても意識していた。しかし，一部効果の評価が低かった学生がおり，効果を感じた学生と比較してプログラムの体験過程にどのような相違があるのか，継続的な調査と検討が必要である。さらに，参加が望ましいと周囲の教職員が思っているにもかかわらず申込みのない学生が支援につながるための工夫も課題であった。

第 8 章 研究 4 発達障害のある大学生の大学環境における苦戦と大学生活に重要なスキルや自己理解のための支援ニーズ——大学生（当事者）による検証——

研究 4 では，研究 1～3 で得た結果・考察について，当事者である発達障害のある大学生の意見を聞き（メンバーズチェック），より具体的に，個別的なエピソードを収集しながら支援ニーズを検証する。

調査は 2 つの大学に在籍する発達障害のある大学生および大学院生 5 名の協力を得た。研究 2 で作成した大学環境における苦戦のリストに関

して、おおよそその項目に苦戦のエピソードが挙げられた。また、研究2で作成したスキル・自己理解のリストに関しても、全般的に重要と捉えられていた。したがって、提示した内容は、発達障害のある大学生の大学環境における苦戦や大学生活に重要なスキル・自己理解として、概ね妥当な内容と言えよう。また、学生は親や友人のサポートを受ける、混み合う時間を避けて登学する等、それぞれに大学適応のための工夫を見つけていた。一方大学での支援に関して、PCや金銭管理といったスキルのトレーニングのニーズは挙げたが、研究3で行ったような時間管理スキルやコミュニケーションスキルの希望は確認できなかった。また、個別の相談をはじめとした教職員とのつながりが学生を支えることが明らかになった。一方で話しかけにくい雰囲気がある等の教職員の対応や、情報提示の方法といった学内システムの課題も確認された。

第9章 総合考察

本研究で挙げた大学環境のリストは、教職員から見ても、発達障害のある大学生から見ても苦戦し得るものであった。またスキル・自己理解のリストに関しても、教職員および発達障害のある大学生共、重要と捉えていた。今後の支援への提言として、1) 大学を中心とした支援の幅を広げる工夫、2) 大学環境における配慮、3) 教職員への啓発、4) 全ての学生を対象とした支援、5) 大学環境についての情報発信、6) 大学移行期以前からの大学適応力の育成、7) 心理職の連携、これらが挙げられる。

本研究の理論的貢献としては、本研究で得た知見は今後、大学教育、臨床心理学、特別支援教育等の各分野において、学生もしくは発達障害のある児童生徒・大学生の学校や大学への適応を分析する際の視点として一助となり得るものである。実践的貢献としては、本研究で整理した発達障害のある大学生が大学生活を送る上で重要なスキル・自己理解は、

より学生の成長を支えるための具体的な手がかりとすることができる。加えて、発達障害のある大学生が苦戦しやすい大学環境や、学生から得た改善課題を大学教職員を対象としたFD・SD研修等の場で発信することで、発達障害のある学生への配慮や環境調整の啓発に資するだろう。

本研究の限界について、本研究は世界がコロナ禍に陥った2020年以降に進められた研究である。こうした特殊な時期の調査であることが、本研究の結果に影響を与えている可能性は否めない。また、本研究中は障害者差別解消法が制定されていたものの、私立大学において合理的配慮の提供が義務となる以前の調査結果であることを認識して結果を読み取る必要がある。

5. まとめ

本研究で挙げた大学環境のリストは、教職員、発達障害のある大学生双方から見て苦戦し得るものであった。またスキル・自己理解のリストも、教職員、発達障害のある大学生共、重要と捉えていた。

以下、今後の支援へ提言する。

1) 大学を中心とした支援の幅を広げる工夫

個々の学生に対応するため、支援体制の充実や、大学移行期の細やかなガイダンス、学内外と連携した支援が求められる。

2) 大学環境における配慮

メールや掲示による情報提示の方法を統一する等、できる限り情報を整理して伝えたり、学生の選択肢を最小化するよう大学が配慮できるだろう。また、授業においては活動内容を構造化する工夫も可能だろう。

3) 教職員への啓発

発達障害のある大学生が大学特有の環境のどのような場面で何故苦戦するかをFD・SD研修等で具体的に周知することは、教職員が大学環境

の改善や学生対応の具体的な手立てを検討する際に役立つだろう。

4) 全ての学生を対象とした支援

全ての学生を対象に，本研究で取り上げた内容を参考に初年次教育を行ったり，大学生活に必要なスキルのトレーニングを行うことも可能だろう。

5) 大学環境についての情報発信

各大学は，主体性といった学生に求める姿勢および行動や，学修システムを含む学修環境を発信し，学生および受験生，保護者，高校と共有していく必要がある。

6) 大学移行期以前からの大学適応力の育成

入学前に大学環境を理解し，自己理解を深めながら適応のためのスキルを準備した上で大学生活を始めることで，円滑な移行が期待できる。

7) 心理職の連携

スクールカウンセラーや障害学生支援コーディネーター等が他職種との連携およびコンサルテーション，異なる職務にある公認心理師同士の連携を行うことで，より長期的で多方面からの支援が期待できる。

6. 主な引用文献

濱田 里羽 (2014a). 大学生を対象とした時間管理スキル育成プログラムの効果の検討——日常生活スキルの変化に焦点をあてて—— 日本カウンセリング学会第47回大会発表論文集, 121.

濱田 里羽 (2014b). 大学生のライフスキルを磨く支援・下 週刊教育資料, (1825), 28-29.

濱田 里羽 (2015). 日常のコミュニケーションに不安を抱える学生を対象とした継続的グループプログラムの試み 学生相談研究, 36(2), 135-146.

- 石隈 利紀 (1999). 学校心理学——教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス—— 誠信書房
- Kessler, R.C., Adler, L., Ames, M., Demler, O., Faraone, S., Hiripi, E., Howes, M.J., Jin, R., Secnik, K., Spencer, T., Ustun, T.B., Walters, E.E. (2005). The World Health Organization Adult ADHD Self-Report Scale (ASRS). *Psychological Medicine*, 35(2), 245-256.
<https://doi.org/10.1017/s0033291704002892>
- Krell, M. M. (2011). *Defining College Readiness for Students with Autism Spectrum Disorders: A Delphi study to Guide School Counselors* (doctoral dissertation). University of Connecticut. ProQuest Dissertations and Theses
- Kurita, H., Koyama, T., & Osada, H. (2005). Autism-Spectrum Quotient—Japanese version and its short forms for screening normally intelligent persons with pervasive developmental disorders. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 59(4), 490-496. <https://doi.org/10.1111/j.1440-1819.2005.01403.x>
- 島本 好平・石井 源信 (2006). 大学生における日常生活スキル尺度の開発 教育心理学研究, 54(2),211-221.
https://doi.org/10.5926/jjep1953.54.2_211
- 田中 浩朗 (2009). 時間管理 初年次教育テキスト編集委員会(編) フレッシュマンセミナーテキスト——大学新入生のための学び方ワークブック—— (pp. 6-13) 東京電機大学出版局
- 高橋 知音・三谷 絵音 (2022) 読み書き困難の支援につなげる 大学生の読字・書字アセスメント——読字・書字課題 RaWF と読み書き支援ニーズ尺度 RaWSN—— 金子書房